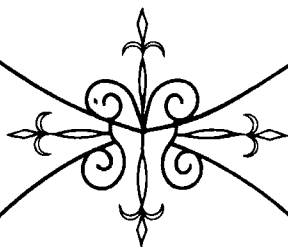




三島由紀夫全集



30

評 論

VI

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

本文印刷 株式会社精興社

口絵印刷 松本精喜堂印刷株式会社

付録印刷 株式会社精興社

口絵製版 株式会社学術写真製版所

製本 大口製本印刷株式会社

製函 日本紙バルブ商事株式会社

本文用紙 特漉上質紙・三菱製紙株式会社

皮革 靱井皮革株式会社

表紙用紙 手漉局紙キラ引・株式会社山田商會

扉用紙 ゴールデンアロー・特種製紙株式会社

見返用紙 しぶ茶堅紙・特種製紙株式会社

函用紙 Sペラン絹目・特種製紙株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

三島由紀夫全集 第三十卷 目次

武田泰淳氏——僧侶であること	九	稽古場のコクトオ	三
春日井建氏の「未青年」の序文	二	地獄のオルフェウス	六
伊東静雄全集推薦の辭	一五	「暗黒のまつり」——コリン・ウィルソ	六
マドリッドの大晦日	一六	ン著 中村保男譯	九
純粹とは	一七	前衛舞踊と物との關係	七
フライヴァシイ	一九	美に逆らふもの	七
ニューヨーク	二三	存在しないものの美學——「新古今集」	七
大統領選舉	二五	珍解	七
アトリエ通信	二六	ポルトガルの思ひ出	九
夢の原料	二九	汽車への郷愁	九
口角の泡——「近代能樂集」ニューヨー	二九	大岡信著「抒情の批判」	九
ク試演の記	三	中村光夫著「バリ繁昌記」	九
座右の辭書	三六	どくとるマンボウ結婚記——北杜夫さ	九
ピラミッドと麻藥	三九	んおめでたう	一〇
旅の夜	四	南蠻趣味のふるさと——ポルトガルの	一〇
あとがき(「スタア」)	四	首都リスボン	一〇
アメリカ人の日本神話	五	作者の言葉(「獸の戯れ」)	一〇

ポボル・ヴフ讚	一〇六	川端康成氏と文化勳章	一〇四
魔——現代的狀況の象徴的構圖	一〇七	服装について	一〇六
冬のヴェニス	一一六	わが小説——「獸の戯れ」	一七〇
日記	一一三	無題（美の襲撃「序」）	一七三
現代女優論——越路吹雪	一一七	「俳優即演出家の演劇」としての歌舞伎	一七四
「橋づくし」について	一二〇	十日の菊	一七七
太陽と死の神話「ポボル・ヴフ」	一二三	法律と文學	一八〇
八月二十一日のアリバイ	一二五	無題（同人雜誌賞選後評）	一八三
青春の町「銀座」	一二九	細江英公氏のリリズム——撮られた	一八四
發光體の思想——石川淳「おまへの敵	一三〇	立場より	一八四
はおまへだ」について	一三〇	社交について——世界を旅し、日本を	一八四
「有間皇子」について	一三〇	顧みる	一八五
「花影」と「戀人たちの森」	一四〇	劍、春風を切る——ただいま修業中	一八七
「狂つた年輪」をみて	一五一	終末觀と文學	一八八
龍灯祭	一五二	わが室内裝飾	一九二
映畫「潮騒」の想ひ出	一五三	青春の荒廢——中村光夫「佐藤春夫論」	一九五
「ホリデイ」誌に招かれて	一六〇	「夏」と「海」を見に出かける——「獸の	

戯れ「取材紀行」	一九	無題(安部公房著「砂の女」推薦文)	二〇
初芝居	二〇〇	無題(市川崑和田夏十著「成城町271番地」序)	二五〇
明治と官僚	二〇一	俳句と孤絶	二五三
カブキはどうなるか	二〇四	私の健康	二五五
「黒蜥蜴」について	二〇七	私の消夏法	二五八
近代能樂集について	二〇九	Four Rooms	二六〇
春先の突風	二一八	ダリ「磔刑の基督」	二六四
若尾文子讀	二二〇	爽快な知的腕力——大岡昇平「現代小説作法」	二六六
「百萬圓煎餅」の背景——淺草新世界	二二五	この十七年の「無戦争」	二六八
「ブリタニキユス」のこと	二二六	最近の川端さん	二七〇
現代偏奇館——澁澤龍彦「犬狼都市」	二二六	デカダンスの聖書——ユイスマン著	二七〇
「神聖受胎」	二三一	澁澤龍彦譯「さかしま」	二七四
ジャン・コクトオの遺言劇——映畫	二三三	「黒の悲劇」の悲劇性	二七六
「オルフェの遺言」	二三三	現代史としての小説	二七八
「綾の鼓」について	二三九	谷崎潤一郎論	二八四
ALBEE とのつかのまの出會	二四一		
「純文學とは？」その他	二四三		

大岡さんの優雅	二九一
堀江青年について	二九四
美しき鹿鳴館時代——再演「鹿鳴館」に ついて	二九七
季節はづれの獵人——堂本正樹氏のこと	二九八
と	三〇一
輕金屬の天使	三〇一
魔的なものの力	三〇三
早田雄二氏とヌード	三〇六
第一の性	三〇八
冷血熱血——小坂 オルチス	三四三
川端康成讀本序説	三四五
無題(同人雜誌賞選後評)	三四九
麗作東京二十不孝	三四〇
踊り	三四三
私の遍歴時代	三四七
小澤征爾の音樂會をきいて	三四七

無題(庭のアポロンの像について)	四六二
女はしかし傳説みたいに	四六四
ミュージカル病の療法	四六七
林房雄論	四九〇
アメリカ版大私小説——「ぼく自身の ための廣告」	五五五
幸せな革命	五五九
ドナルド・キーン「日本の文學」	五六〇
子供について	五六七
「演劇のよろこび」の復活	五七一
細江英公序説	五七四
「トスカ」について	五八一
無題(「ボオ全集」推薦文)	五八二
私の中の「男らしさ」の告白	五八三
ジュネの「女中たち」	五八七
無題(鈴木徳義個展推薦文)	五八八

三島由紀夫全集 第三十卷 評論 (6)

武田泰淳氏——僧侶であること

武田泰淳氏のいろんなおもしろい特質を、結局、坊さんだからといふことで片付けてしまふのは、平板な論法である。しかし試みにこの平板さを承知で、さういふ論法を辿つてみると、まことにうまく符合することもたしかである。われわれもよく、

「又泰淳さんに引導を渡されちやつた」

などと言ふ。これは氏が、私なら私の作品を評して、

「あれはすごい傑作だなア。君、實にすごいよ。ちやんと、ああいふ風に出来ちやふんだからなア」

などと言ふときに使はれる。氏は誰にでもかういふ言辭を弄するから、言はれたほうでは照れ隠しが半分、抗議が半分といふ氣持で、「引導」とでも表現しなければ納まらなくなる。お世辭でないことは明らかで、氏はお世辭なんか言ふ人ではない。辛辣な皮肉かといへば、世間の常識ではそれに近いのだが、あまりにも溫かい抱擁的氣分が勝つてゐて、辛辣といふ言葉は似合はない。

つまり、この世のものではないやうな評價基準や、彼岸的客観性で、判断してもらつたやうな氣がして、何だかむしやうにありがたくなり、泣いていいのか、笑つていいのか、引導を渡され

たといふのは、かういふ氣持だらうと想像されるのである。

——一事が萬事、氏のふしぎな粘液質のノラリクマリ性や、明朗なノンシャランスと暗い情慾の異様な對照や、哲學と政治との間を天馬空をゆくがごとく駈けまはる姿勢や、……かういふものは、京都あたりでわれわれが會ふ現代の名僧智識とも、相通ずるところがあつて、その上、氏自身が、作品の中で、「僧侶であること」のコムプレックスを執拗に展開するから、

「ああ、成程、やつぱり坊さんだから」

——といふ俗見がはびこることになるのも是非がない。

しかし一人の作家を評價するのに、彼がピッコだからとか、マゾヒストだからとか、さういふものを前提にした評論は一番つまらない。精神分析の本を一二冊讀めば、何かのコムプレックスで作家の全作品を説明するのは易々たる業で、子供でもできることである。

コムプレックスとは、作家が首吊りに使ふ踏臺なのである。もう首は繩に通してある。踏臺を蹴飛ばせば萬事ははりだ。あるひは親切な人がそばにゐて、踏臺を引張つてやればおしまひだ。

……作家が書きつづけるのは、生きつづけるのは、曲りなりにもこの踏臺に足が乗つかつてゐるからである。その點で、踏臺が正しく彼を生かしてゐるのだが、これはもともと自殺用の補助的道具であつて、何ら生産的道具ではなく、踏臺があるおかげで彼が生きてゐるといふことは、その用途から言つて、踏臺の逆説的使用に他ならない。踏臺が果してゐるのはいかにも矛盾した役割であつて、彼が踏臺をまだ蹴飛ばさないとはいふことは、半ばは彼の自由意志にかかはることであるが、自殺の目的に照らせば、明らかに彼の意志に反したことである。

ところで、作家によつて、塗りのやつとかチーク材のやつとか、使ふ踏臺の種類もさまざま形

もさまざまであるが、僧侶型踏臺といふのはめづらしい。

「異形の者」を読むと、この踏臺の意匠が詳細に説明されてゐるが、氏にとつて僧侶であることは、性と社會と兩方に足をかけたコムプレックスであつて、こんな藝術制作に好都合な事例は、フロイドの本にも出てゐないのである。そして往時のやうに僧職の榮えた世であつたら、純粹な性的コムプレックスに定着したであらうところのものを、現代のやうな無信仰な時代にあつて、氏はそれを幼時から、社會的コムプレックスとの豊富な錯雜のうちに身につけて、作品の美しい混沌を生む母胎としたにちがひないのである。

僧侶であること〈初出〉日本文学全集63月報・新潮社・昭和三十五年九月
武田泰淳氏——僧侶であること〈初刊〉「美の襲撃」・講談社・昭和三十六年十一月

春日井建氏の「未青年」の序文

序文といふものは、朝、未知の土地へ旅立つてゆく若い旅人に與へる「馬のはなむけ」のやうなものである。あたりはまだ薄闇に包まれてゐて、やがては汗ばむことになる馬の鬣も、ひんやりと朝露に濡れてをり、前脚ははやるやうに蹄を擧げて草を踏みだしてゐる。若い旅行者は元氣よく馬の背に鞍を乗せ、腹帯をきつく締め、さて馬に打ち跨がつて、馬上から見送りの人へ振向いて微笑する。しかしその顔にはすでに未知の土地の幻影がかがやいてをり、昨夜まで滞在してゐた地方は、朝霧のやうに急速に、その記憶から拭ひ去られてゆくのが見てとれる。序文の筆者は、ただ馬の鼻先を、未知のはうへ向けてやればよいのだ。それで萬事ははりだ。馬は走り出し、旅人は二度とこちらを振向くことがない。

春日井建氏のこのブリリアントな處女歌集に贈る私の序文も、それ以外のものであつてはならない。しかしすでに、目先しか見えない人々の間で、氏の歌がやすやすと前衛短歌などといふレッテルを貼りつけられてゐる、さういふ俗悪な誤解は、この機會に解いておかなければならぬ。

歌とは昔からこのやうなものであつたので、今後もこのやうなものであらう。春日井氏の表現は獨創的であつても、發想そのものは古典と共に獨創的ではない。定家が頼朝の擧兵をきいて、

明月記に、あの有名な一句「紅旗征戎非吾事」を書きつけたのは、十九歳の時であつた。春日井氏が歌といふ形式を選んだのは、宿命といふよりも、一人の抒情的な魂のこのやうな決断である。そして抒情も、昔からこの歌集の諸篇のやうなものであつた。

言葉が、氏の場合、柔らかな生身を守る固いきらきらした胸甲のやうになつてゐるのは、今日の若者の場合、當然の抒情的要請である。言葉にはふしぎな逆説的機能がある。言葉で固く鎧へば鎧ふほど、柔らかな生身はますますいたましく鋭い外氣にさらされなければならぬ。氏は詩語を平氣で蹴ちらかし、強引な觀念聯合を設定するが、かうした外界の現實への抵抗の姿勢が、逆になまなましい傷つきやすい赤裸の肌をさらけ出してゐるのである。胸甲のやうな言葉の金屬性は、現代に對する敏感な反應であつて、言葉をうすい皮膚のやうになめらかに身にまといつてゐる既成歌人たちは、現代に對して鈍感なだけのことである。その代り、彼らは傷つくことから免かれてゐる。抒情は言葉の皮膚の上にとどまつてゐるからだ。しかし赤い立派な胸甲を持ちながら、春日井氏の魂は裏返ししの海老である。その魂は、歌集のいたるところで、活作いきづくりの海老のやうにびくびくと慄へてゐる。私はこの肉の顯在を愛する。

又一つ言ふと、歌には殘酷な抒情がひそんでゐることを、久しく人々は忘れてゐた。古典の櫻や紅葉が、血の比喩として使はれてゐることを忘れてゐた。月や雁や白雲や八重霞や露や、さういふものが明白な肉感的世界の象徴であり、なまなましい肉の感動の代置であることを忘れてゐた。ところで、言葉は、象徴の機能を通じて、互たみに觀念を交換し、互たみに呼び合ふものである。それならば血や肉感に屬する殘酷な言葉の使用は、失はれた抒情を、やさしい櫻や紅葉の抒情を逆に呼び戻す筈である。春日井氏の歌には、さういふ象徴言語の復活がふんだんに見られるが、

われわれはともあれ、少年の純潔な抒情が、かうした手續をとつてしか現はれない時代に生きてゐる。

現代はいろいろな點で新古今集の時代に似てをり、われわれは一人の若い定家を持つたのである。

——一九六〇年六月——

序〔初出〕春日井建著「未青年」・作品社・昭和三十五年九月
春日井建氏の「未青年」の序文〔初刊〕「美の襲撃」・講談社・昭和三十六年十一月